【論　文】

Kohut によるエディプス・コンプレックス論の修正と父親の役割モデル

上地雄一郎
（岡山大学大学院教育学研究科）

Kohut（1977）が行ったエディプス・コンプレックス論の修正について紹介し，父親の肯定的役割に注目することの意義を述べた。次に，Kohut（1977）と類似の見解である Abelin（1971,1975），Blos（1985），牛島・福井（1980）の見解を紹介し，これらの見解を，①子どもを去勢する父親（古典的精神分析の視点），②子どもの男性性または女性性を強化する父親，③母親からの分離-個体化を促進する父親，④母親の失敗を代償する父親という四つの視点（モデル）として整理した。次に，Kohut（1979）の『Z 氏の事例』を上記の観点から再分析した結果，Z 氏の回復過程には②③④の視点がすべて適用できること，また，③の視点は②の視点と表裏の関係にあることを，筆者の見解として述べた。

キーワード：エディプス・コンプレックス，父親の役割モデル，Ｚ氏の事例

１．はじめに

本論文では，自己心理学の創始者 Kohut によるエディプス・コンプレックス論の修正と，父親の役割モデルを取り上げる。この問題を取り上げる理由は，以下のとおりである。Kohut（1977）によるエディプス・コンプレックス論の修正は，エディプス・コンプレックス論が精神分析において占める位置づけを考慮すると，きわめて重要な修正であり，また欲動理論から関係性理論への転換を象徴するものである。そして，心理療法におけるクライエントの問題への理解や応答に大きな変更を迫るものである。ただ，Kohut（1977）によるエディプス・コンプレックス論の修正には，若干議論の余地のある部分が残っている。それは，他の研究者が述べている類似の見解との比較検討であり，他の研究者の見解をも取り入れることが Kohut 理論をさらに豊かにするかどうかについての検討である。本節の目的は，これらの点を論じることである。

議論の順序としては，まず，Kohut（1977）のエディプス・コンプレックス論について述べ，次に他の研究者の類似の見解を紹介する。そして，これらの議論から，父親の役割についての複数のモデルを抽出し，Kohut（1977）のモデルも含めて比較検討する。次に，これらのモデルの有効性を検討するために，これらのモデルを Kohut（1979）が報告した事例の理解に適用する。取り上げる事例は，Kohut が報告した事例のうち，その治療経過が最も詳しく述べられている「Z 氏の事例」（Kohut, 1979）である。

２．Kohut におけるエディプス・コンプレックス論の修正

（１）古典的なエディプス・コンプレックス論

Freud（1917）によれば，子どもは，エディプス期に達すると，生来的な要因（欲動）によって異性の親に性的願望を抱き，同性の親には敵対的感情を抱くとされる。男子の場合には，母親を独占したいために父親を敵視する。しかし，このような願望を抱いているために父親から拒絶・処罰されることを恐れる（去勢不安）。このような不安や葛藤は子どもの側の全面的自己変容によってしか解決できず，男子は母親への性的願望を抑圧する。そして，父親に同一化し，父親の属性を内在化していく。この過程で社会的規範も内在化され，超自我が形成される。女子の場合には，自分や母親には男根がないという事実を知って喪失感を抱く（去勢コンプレックス）。女子は男根を持つ父親に接近し，父親を所有することによって喪失を乗り越えようとする。その過程で母親との葛藤が生じてくる。このような説明は欲動理論に基づくものであり，性的欲動や攻撃欲動が生来的なものとして想定され，それがエディプス段階になると発動してくると考えられている。その意味で，エディプス・コンプレックスや去勢コンプレックスは誰もが体験する普遍的なものとみなされているわけである。

（2）Kohut によるエディプス・コンプレックス論の修正

ところが，Kohut（1977）は，上記のような古典的精神分析理論に疑問を提出した。Kohut（1977）の見解は，エディプス・コンプレックスや去勢コンプレックスが生来的・普遍的なものであるとする仮定に疑問を投げかけるものであり，エディプス・コンプレックスや去勢コンプレックスを自己対象（親など）との関係性の歪みから発生してくる病理的なものとみなす考え方である。その意味で，Kohut（1977）の見解は，「欲動モデル」から「関係性モデル」へのパラダイム・シフトを伴うものということができる。次に，Kohut の理論を詳しく紹介することにする。

Kohut（1977）は，エディプス・コンプレックスや去勢コンプレックス自体の存在を否定するのではない。Kohut（1977）によれば，“Freud の発見した資料そのものを疑問視しているのではなく，それらを解釈する理論的枠組みの適切性を疑問視する”（Kohut, 1977, p.223）のである。

Kohut（1977）によれば，健康な親子関係のなかで発達する子どものエディプス期は，Freud が描写したようなものではない。Kohut（1977）が言うには，健康な発達を遂げてエディプス期を迎えた子どもは，確かに，①異性の親に対して独占的・情愛的態度を向ける。また，②同性の親には，主張的・競争的態度を向ける。そして，健康な親でも，このような子どもに対して，性的刺激を受けたり反撃的になったりすることがないわけではない。しかし，健康な親は，このような子どもの発達に対して，喜びと誇りをも感じるのである。健康な親の反応には，性的・攻撃的な要素と喜び・誇りという要素が融合している。このような親の応答を一言でいえば，男性性あるいは女性性を備え始めた子どもの自己を肯定する応答であるということができる。

Kohut（1977）によれば，Freud が描写したようなエディプス体験は，親が上記のような全体的応答をすることができない場合に出現する。全体的な応答ができないというのは，親が子どものエディプス的な情愛の性的要素や主張性の攻撃的要素のみに選択的に反応する場合である。例えば，子どもが異性の親にエディプス的情愛を表現し

た場合に，異性の親が性的刺激を受けて誘惑的な態度を示したり，逆に防衛的になって禁止・拒否的態度や無反応で応じたり，同性の親が競争的・敵対的応答をしたりする場合である。子どものエディプス的な情愛も主張も，それは発達的達成の顕示であり，親からの肯定的応答を求めているわけである。それに対して親が拒絶，無反応，過剰刺激などの形で反応するなら，情愛や主張性は異和的なものと体験され，自己のなかに統合されることがない。このとき，本来なら性的にはならない情愛が性的なものと化し，本来なら敵対的にはならない主張性が敵対的なものになるのである。Freud（1917）によってエディプス期特有とされた情欲（lust）や攻撃性は，このようにして生じるのである。そして，エディプス的な情欲や攻撃性の強まりは，自己対象（注１）から適切な応答が得られなかったために凝集性が低下した自己が凝集性感覚を回復しようとする試みでもある（Lessem, 2005）。

（注１）自己対象（selfobject）とは，Kohut の自己心理学に特有の概念であり，自己にまとまりや自尊感情や活気を与えてくれる他者体験のことである。この言葉は，もともとは自己の一部のように体験される他者という意味で使用されていたが（Kohut,1971），後に，自己がまとまり，自尊感情，活気などを保って存在するための基盤となる他者体験を意味するようになった（Kohut,1971,1984）。

上記のような（自己に統合されていない）性的衝動や敵意は，不安や葛藤を生じさせる。Freud 理論で問題にされる幼児性欲，敵意，去勢不安，罪悪感，葛藤などは，このようにして出現するのだと Kohut（1977）は言う。したがって，エディプス的な不安や葛藤は，自己対象との関係の障害に基づく「二次的（secondary）」なものであり，「一次的（primary）」なものではない。去勢不安に関して言えば，去勢不安は二次的なものであり，その背後に一次的不安が存在する（Kohut, 1984, p.16）。それは，自己対象から共感的応答が得られないことによる自己喪失への恐れ，つまり統合崩壊不安（disintegration anxiety）である。なお，統合崩壊不安とは，自己の崩壊に対する不安，つまり自己がまとまりや活気を失って無意味さや空虚感にのみこまれてしまうことへの不安である。

Kohut 自身は述べていないが，女性にみられるエディプス的な性的空想についても同様のことがいえるであろう。Freud は，女性のヒステリー患者が幼年期に周囲の男性から性的行為をされた体験を語るという事態に遭遇し，最初これを事実と考えたが，後にこれを患者の空想とみなす立場に転向した。ところが，Freud の弟子である Ferenczi（1933 森訳 2000）は，催眠状態において患者が想起する性的被害体験には事実が含まれていると考え，すでに 1933 年時点で性的虐待を告発する論文を書いている。そして，そのような性的被害を受けた女性患者に性的空想がみられるのは，加害者の成人男性の性的欲求に同一化した結果であると主張した。この Ferenczi（1933　森訳 2000）の見解も，女性患者の性的空想を生来的な欲動の現れとしてみるのではなく，加害者である成人男性との関係性の歪みの結果とみなす点において，Kohut（1977）のエディプス・コンプレックス論と通じる面がある。Freud がヒステリーの原因を幼年期の性的トラウマと考える「性的誘惑論」を捨て，患者が語る性的誘惑の体験を患者の空想または願望の充足であるとみることに対しては，上記の Ferenczi（1933　森訳 2000）からの批判

だけでなく，Masson（1984）よる批判も有名である。Masson（1984）は，性的誘惑を受けたという患者の訴えをFreudが軽視してしまったのは性急すぎたと批判し，実際には患者の訴え通りの性的誘惑や近親相姦が相当数存在していたのではないかと示唆している。Kohut（1977, 1984）の見解は，Freudが放棄した性的誘惑論の復活とも受け取れる面がある。Kohut（1977, 1984）の見解は，エディプス・コンプレックスの発生において，実際に起きた親の対応の不備を重視しているからである。

ともあれ，上記のような考察に基づいて，Kohut（1977）は，Freud（1917）の言うエディプス・コンプレックスは病理的発達の現れではないかと結論する。Kohutは，“正常なエディプス・コンプレックスは我々が信じているほど暴力的でも不安なものでもなく，深い自己愛的傷つきを伴うものでもない”とし，“我々は，エディプス期の自己対象の共感的失敗に対する子どもの反応にすぎない願望や不安を正常な出来事とみなしてしまったのではないか”と問題提起している（Kohut, 1977, p.246）。Kohut（1977）は，自己愛性パーソナリティ障害患者が，治療末期に健康な主張性，対決，競争の態度を示すようになることを見出しているが，Kohut（1977, 1984）によると，これこそが健康なエディプス段階の到来なのであり，過去のエディプス・コンプレックスの転移的反復ではないという（Kohut, 1977, p.228）。

本論文の事例研究の章でも指摘することであるが，母親との間に病理的癒着があり父親に敵意を抱く男子の事例では，父親自身が未熟なパーソナリティであったり，息子との関係が疎遠であったりするため，父親が息子の重要な欲求に答えることができていない。母親はそのような夫への失望から息子を巻き込み，共生的関係を形成している。健康な男性的自己を形成するのに必要な理想化された父親との一体感を与えてもらえない男子が，父親に失望し，父親を憎むようになったとしても，また，唯一の自己対象である母親との共生的関係から離脱できなかったとしても，不思議なことではない。そして，このような男子が母親との共生的関係から離脱することを望んでいないと断定するのも誤りであろう。母親との共生的関係から離れたいと願い，それを可能にしてくれる父親的自己対象を密かに希求していると考えられるのである。

古典的精神分析理論では，エディプス期の課題として同性の親との対決・競争が重視されている。確かに，同性の親に限らず，子どもが親に対して過度に順応し，対決・競争がまったくできないというのは問題であろう。しかし，子どもと同性の親との関係を，対決と競争だけを軸にして見るのは適切ではない。例えば，エディプス的主張性を父親にぶつけて父親と張り合う男子も，同時に男性的自己の形成のために父親の自己対象的応答を必要としている。父親と対決・競争しながらも，同時に父親からの映し返しや父親への理想化を必要としている。この二つの要素が渾然一体となっているのが自然な姿であると考えられる。Kohutによれば，“男子が父親から父親に似た存在として誇りをもって見られており，父親や父親の大人としての強さに一体化するのを許されていると感じるなら，・・・（中略）・・・エディプス期は男子の男性性の獲得において決定的な一歩となる”という（Kohut, 1977, p.234）。

（3）女性の去勢コンプレックスについて

自己心理学的視点に立つなら，女性の男

根羨望（penis envy）や去勢コンプレックスも，自己対象との関係おいて考える必要がある。Kohut（1984）によれば，これらは，女性が女性性を発達させ，女性性を表出・顕示する時期に，①自己対象が適切な映し返しで応じることができなかったこと，②理想化できる女性像が存在しなかったこと，③自分との類似性が感じられ，分身のように思える女性がいなかったことなどの要因が重なった結果生じるのである（Kohut, 1984, p.21）。つまり，女性性を備えた自己を肯定するのを助けてくれる自己対象（注２）が存在しなかった場合に，男根羨望や去勢コンプレックスが生じるということである。

（注２）Kohut は，自己対象を「鏡自己対象（mirroring selfobject）」，「理想化自己対象（idealizing selfobject）」，「双子自己対象（twinship selfobject）」に分類した。鏡自己対象とは，自己のすばらしさや価値を確認・賞賛してもらう他者体験である。理想化自己対象とは，完全性や平静さを備えた他者と一体化することにより苦痛な感情が緩和されたり，平穏な気分状態が維持されたりする体験である。双子自己対象とは，他者との間で類似性や親近性を体験することによって自己が支えられる体験である。

男根羨望や去勢コンプレックスを示すと思われる現象も，視点を変えれば異なる解釈が可能なことを示す実例が，Kohut 自身によって提示されている（Kohut, 1977, pp.220-222）。それは，Ｖさんという女性患者の「トイレで立って排尿している。誰かが背後で見ている」という夢に対する解釈である。Ｖさんは，これと似た夢を何度も見たことがあった。また，Ｖさんには，過去に父親の体とくに性器を見たいと願った時期があった。そのため，Ｖさんが以前に精神分析を受けた分析家は，Freud 理論に従って，この夢を次のように解釈した。つまり，Ｖさんはペニスをほしがっているのであり，この夢は少年のように立って排尿したい願望の現れだと解釈したのである。ところが，Kohut（1977）の解釈は，これとは異なっていた。Kohut（1977）の解釈は，この夢には分析家に対する感情と子ども時代の未解決の問題とが収斂しており，「奇妙で情緒的に浅薄な母親との関係から離れ，情緒的に手ごたえがあり現実に根ざしている父親に近づきたいという欲求を示している」というものであった。この解釈に触発されて，Ｖさんは，母親から，「汚れ，感染，細菌が恐いから，家の外ではトイレに座らないように」と教えられてきたことを思い出した。母親のこのような教えは，世の中に対する隠れたパラノイド性を示していた。Kohut（1977）が言うには，父親のペニスを見たいという欲求は，“世の中への肯定的で非パラノイド的な態度を求めて父親に近づこうとする試みの性愛化されたもの”である。夢に現れている患者の中心的欲求は，父親からペニス＝赤ん坊を与えられたいということではなく，母親の影響に打ち勝ち，世の中と直接的で強い接触を維持するための支持を得たいということであった。

（４）母親との関係を補償する父親

Kohut（1977）は，子どもの自己が母親の応答の欠陥によって外傷を負った場合にも，父親との関係からその外傷を補償する自己の構造（二次的構造）が育つ場合があることを指摘した。発達早期に形成され，自己凝集性，活力，調和の維持において本質的な機能を果たす構造を一次的構造（primary structure）というが，二次的構造は一次的構造の欠損に対処するために生じ

る。例えば，発達早期の母親の映し返しについて子どもが外傷的な不満や失望を体験したとしよう。子どもの自己は，活気を失い，言語化できない抑うつ，空虚感，未分化な怒りなどを体験する。そして母親の映し返しによって育つべき自己の機能が未発達にとどまる。また，自己を顕示したい，認められたいと願う原始的な形の欲求が残存し続けるであろう。このような自己の欠損がもたらす影響を軽減し，自己の活気やまとまりを維持するために発達するのが二次的構造である。Kohut（1977）は，二次的構造を「防衛的構造（defensive structure）」と「補償的構造（compensatory structure）」に分けている。

まず，防衛的構造とは，自己の欠損を覆い隠すことを唯一または主要な機能とする構造である（Kohut, 1977, p.3）。また，防衛的構造は自己の健康な残存部分を維持するための構造ともいえる。Elson（1986, p.256）は，“自己の構造的欠陥を覆い隠す活動や空想。低い自尊心を高めるために企てられる。効果的とはいえず，際限なく必要とされる”と定義している。防衛的構造は，現象的には，性愛化された空想，誇大的空想，過活動などの形を取る（Kohut, 1977, p.5）。防衛的過活動の背後には，低い自己評価と抑うつ（自分が無価値であり拒否されているという根深い意識），飽くことを知らぬ反応への飢えと再保証への希求が存在している。駆り立てられたような過活動は，自己刺激を通して内面の生気のなさと抑うつを打ち消そうとする試みである。その他，病理的とされる行動の多くは防衛的構造が関与しているといってもよい。

一方，補償的構造とは，一次的構造の欠損があっても，自己が凝集性や活気を保ち，衰弱，抑うつ，空虚感などに陥らないようにさせるものである。しっかりと形成され，有効に機能する補償的構造は，創造的な人生を可能にする。この点が防衛的構造との相違である。補償的構造は，外傷的ではなかった自己対象（または外傷的自己対象の外傷的でなかった側面）との間でなされた体験を基にして発達する（Kohut, 1984）。具体的には，ある自己対象への同一化を通して形成された興味，目標，才能・技能などが自己に活気，充足感，自尊心などをもたらす場合に，補償的構造が存在すると考えられる。

3．Kohutと類似の見解

Kohutと同様に，父親との競争的・敵対的関係ではなく，肯定的関係の重要性を指摘した研究者は他にもいる。古くは，Loewald(1951)が，エディプス期以前の男子にとって父親は積極的に同一化したい陽性のイメージでとらえられており，この父親イメージが自我の発達に重要であることを指摘した。分離-個体化理論の提唱者であるMahler, Pine, & Bergman（1975)の研究を発展させたAbelin(1971, 1975)によれば，分離-個体化過程（とくに再接近期）において，父親は幼児が母親との共生的関係から脱却するのを助ける。父親への愛着は，練習期に増大し，再接近期にはさらに重要性を増す。父親は，幼児が母子共生から脱却して参入する新たな現実を代表する存在となる。母親とは別の力強い親としての父親の表象が確立すると，この父親像は幼児が母子共生の未分化な状態に逆戻りすることを防ぎ，再接近期特有の母親へのアンビヴァレンスの解決を助けるという。

ジェンダー・アイデンティティ(gender identity)についての研究からも同様の事実が指摘されている。男子の場合を例にとると，

男子は，発達早期の母親理想化と母親同一化から脱却し，同一化対象を父親（的人物）に置き換えることによって，男性としてのジェンダー・アイデンティティを形成する（Greenson, 1968）。父親が男性像のモデルとなることができないなら，母子の共生関係が遷延し，ジェンダー・アイデンティティの障害につながることがある（Stoller, 1968; 及川, 1983）。

これらの研究を継承し，また自分自身の臨床経験に基づいて，Blos(1985)は，男子の前エディプス期における父親への愛着・理想化が男子の発達にとって本質的な意味をもつと主張する。父親に保護され導かれることによる安心感や同性としての一体感は，男子のジェンダー・アイデンティティや自尊感情の発達にとって重要なものである。とくに，父親への理想化とそれからの脱却は，精神分析で自我理想と呼ばれてきた心的構造の形成に深い関わりをもっている。まず父親を理想化し，次第に理想化から脱却するとき，父親の理想化された側面は人格性を伴わない心的構造に変容するが，Blos（1974）はこれを自我理想と呼ぶ。自我理想は，理想，価値，目標などとして経験され，自我理想が形成されると自尊感情を維持するのに父親の承認や賞賛を必要とする度合いが減少し，自我理想に到達しようとすることが自尊感情を支えるようになる。

したがって，父親を理想化できないか父親への時期尚早な失望を体験する場合や，逆に父子の結びつきが濃密すぎて脱理想化ができない場合には，自我理想が十分に形成されず，理想化された父親への希求がいつまでも残存することになる。Blos（1985）は，このような事態を「父親コンプレックス」と呼ぶ。Blos（1985）によれば，このような父親コンプレックスからの脱却と成人としての自我理想の形成という発達課題は，青年期まで持ち越され，青年期の重要な発達課題になる。父親コンプレックスをもつ男性は，とくに母親との共生的関係にのみ込まれてしまう不安に脅かされやすく，それに対する防衛が必要になる。そうした防衛の例としては，女性を性的に征服しようとする強迫的性行動や，逆に女性との関係の回避や同性愛的空想への没頭などがある。Blos（1985）の臨床経験によれば，父親コンプレックスの解決とともに成熟した異性関係も可能になるという。

また，これ以外に，牛島・福井（1980）も，思春期における理想化された父親像の重要性について述べている。牛島・福井（1980）は，思春期患者が母親との共生的関係から脱却していく過程で，理想化された父親像が語られる事実を観察した。牛島・福井は，このような父親像を「前エディプス的父親像」と呼び，母親からの離脱の過程を支えるものであると指摘している。

４．父親の役割に関するモデル

以上のような議論に基づいて，父親の役割に関するモデルを整理すると，以下のようになるであろう。

①子どもを去勢する父親

これはFreud理論でいわれるような父親の役割である。父親を排除して母親を独占し，母親の関心を一身に浴びることができるという子どもの万能感を放棄させ，父親への同一化を可能にする役割である。

②子どもの男性性・女性性を強化する父親

Kohut（1977）が強調し，Blos（1985）考え方のなかにも暗示されている役割である。幼児の芽生え始めた男性的自己あるいは女性的自己を育む役割である。

③母親からの分離-個体化を促進する父親

Abelin（1971,1975）が強調し，Blos（1985）も取り入れている見解である。母親からの分離-個体化の段階は，幼児期であれ青年期であれ，母親との関係が依存と自立の葛藤に巻き込まれてアンビヴァレントなものになりやすいが，父親はそのような葛藤に汚染されないことから，父親を支えにできることが母親からの心理的分離を容易にする。

後にくわしく述べるが，Kohut（1977, 1979, 1984）には，この「分離-個体化を容易にする父親」という視点がなく，これに相当する現象を自己対象体験の成熟として，つまり分離よりも結びつきを強調して説明する傾向が強い。

④母親の失敗を補償する父親

Kohut（1977, 1984）が強調した役割であり，母親との外傷的関係によって生じた自己の欠損を補償する自己の構造（補償的構造）を育てる父親の役割である。

この４つのモデルは，相互背反的なものではなく，並存しうるものであると考えられるが，このように整理することにより，クライエントの生活史において父親のどの役割が欠如していたのかが推測しやすくなり，かつクライエントが現在希求しているものがどの父親役割なのかがつかみやすくなると考えられる。

上記の父親役割は併存しうるものであると述べたが，古典的精神分析では，息子と父親との関係は，前エディプス期には平穏であっても，エディプス期に入ると競争的・敵対的になるかのように考えられる傾向がある。Mollon(1993)によれば，この傾向はとくにアメリカの精神分析界に著しかったという。Mollon(1993, p.130)は，この人為的区別を批判し，“理想化された自己対象としての父親，鏡のように映し返してくれる自己対象としての父親，エディプス的競争相手としての父親は，どれも父親との関係に付随する相互に絡み合った側面である―つまり，子どもは，父親を尊敬したいと願い，尊敬の対象であるこの人物から関心を向けられたいと願い，同時に，父親と競争できることを願い，また父親から一人前の小さな競争相手として尊敬されたいと願っているのである”と述べている。Mollon(1993)の指摘を言い換えるなら，父親から承認・賞賛されたい，父親を理想化したい，父親と競争したい，また父親から競争相手とするに足る存在として認められたいという願いは，それぞれ性格を異にするものではあるが，互いに絡み合って同時に存在しているのが実態だということである。

次の項では，このことを Kohut 自身の事例を通して検証してみたい。取り上げる事例は，Kohut の事例でもっとも有名なＺ氏の事例（Kohut, 1979）である。この事例は，Kohut の事例報告のなかで最も有名なものであり，Kohut が最初は古典的精神分析の視点で精神分析を行い，一旦終結した後に，患者の求めに応じて２回目の精神分析を今度は自己心理学的視点から行った事例である。

５．Ｚ氏の事例を通しての父親の役割モデルの検討

次に，Ｚ氏の事例を提示し，その後に前節で提起した父親の役割のモデルについて検討する。Ｚ氏の事例は，原文をそのまま提示すると紙数が多くなることから，筆者が要約したものを提示することにする。

（１）Ｚ氏の事例の提示

①Ｚ氏の概要

Ｚ氏は，分析開始当時20代半ばの男性で，

大学院生であった。父親は実業家であり資産家でもあったが，４年前に死んでいた。Ｚ氏は，母親と一緒に暮らしていた。彼の主訴は漠然としていたが，不整脈，手の発汗，喉がつまる感じ，便秘や下痢といった心身症的症状，女性と関係が持てないための孤立感，大学で能力を発揮できないことが中心であった。しかし，彼が分析治療を求める直接の動機になった出来事は，高校時代からつきあっていた男性の友人が彼から距離をおき始めたことであった。Ｚ氏はこの友人とのつきあいのおかげで，侵入的で支配的な母親から逃れ，心理的安定を保つことができていた。

Ｚ氏の問題の細部は，Ｚ氏の抵抗を克服することによって少しずつ明らかになっていった。彼は頻繁に自慰を行っており，自慰に伴う空想は，「強くて要求がましく飽くことを知らない支配的な女性から性行為を強いられる」というマゾヒスティックな内容であった。家族の写真や動画から，１才半までのＺ氏は幸福な子どもだったことが推測できた。しかし，Ｚ氏が３才半の時に父親が病気で入院した。その後，父親は家を出て，入院時に知り合った看護師と一緒に暮らすようになった。父親は，１年半後，Ｚ氏が５才のときにその看護師と別れて家に帰ってきた。しかし，夫婦関係は父親の死の２，３ヶ月前まで改善せず，緊張に満ちたものであった。

②第１分析（古典的精神分析）

＜第１期＞Ｚ氏の分析の１年目のテーマは，「退行的な母親転移」であった。つまり，Ｚ氏は，理解されたいという欲求が強く，理解してもらえないと怒って抗議した。週末の分析の中断，時間変更，Kohut の休暇などに反応して，怒りや抑うつが生じ，心気症的とらわれや自殺念慮も出現した。Kohut は，このようなＺ氏の自己愛的欲求および自分は特別だという尊大な感情を，「母親との前エディプス的関係への退行」であり，母親を独占できた１才半までの自己愛的段階への固着とみなした。そして，「Ｚ氏は，母親を自分だけのものであると考え，自分を去勢する父親は家にはいないという幻想を維持している」のだと解釈した。Ｚ氏は，Kohut の解釈に対して怒りを交えて抗議した。その結果，分析の最初の１年半は，Ｚ氏の怒りに支配された。

＜第２期＞分析開始後１年半が経過した頃から，Ｚ氏の怒りや要求は減少していった。Kohut は自分の理解と説明が効果をあげたのだと確信した。ところが，Ｚ氏の方は，怒らなくなった理由を Kohut の発言に対する反応だと主張した。Kohut は，あるとき解釈を行う前に「もちろん，自分が当然与えられるべきだと思うものを与えてもらえないと傷ついてしまいますが」という言葉をさしはさんだ。この言葉がＺ氏を変えたというのである。Kohut は，Ｚ氏が面子を保ちたいためにこんなことを言っており，未解決のエディプス的問題を否認しているのだと思ったが，そのままやりすごした。なぜなら，分析がスムーズに進み始め，Ｚ氏が前エディプス的母親への自己愛的備給を放棄しつつあると思われるので，その流れを妨げたくないと思ったからである。

Kohut の解釈は，Ｚ氏に二つの記憶を呼び起こした。ひとつは原光景に関する記憶であり，もうひとつはマゾヒスティックな空想を伴う自慰であった。彼は，５歳から８歳まで両親と一緒に寝ていたので，両親の性交を目撃していた。また，父親が帰ってきた５歳の頃から自慰を行い始めた。自慰

の時には，女性によって奴隷のように取り扱われるとか，女性の排泄物を始末するといったマゾヒスティックな空想に耽った。Kohutは，古典的精神分析の理論にしたがって，次のように考えた。Z氏の空想は，「母親を所有したいという願望に対する無意識の罪悪感の現れ」である。空想の中に登場する女性は，男根を持った支配的な女性である(注3)。Z氏は，「母親は強いペニスをもっていて，父親よりも強く，去勢者としての父親を恐れる必要はない」と思うことにより，去勢不安を否認しているのである。

（注3）古典的精神分析では，子どもに父親が不要であるかのように考え，自分が父親（夫）の役割まで果たせるかのように振る舞う支配的な母親を，ペニスをもっている（かのような）母親という意味で「男根的母親(phallic mother)」と呼ぶ。なお，精神分析では，男性性器を表すペニスという言葉とファルス（phallus）という言葉は，区別して使用される。ペニスが身体部位としての具体的な男性性器を指すのに対して，ファルスとは，男性性器に象徴される男性的な力や母親の欲望を満たすものというような意味で使用される。

また，Z氏は11歳のときにサマーキャンプで知り合った男性カウンセラー（高校教師）との関係について語った。Z氏は，この教師の野外活動家としての能力や哲学・文学・音楽についての教養を尊敬していた。彼との関係は2年にわたって続き，ついに互いの性器を愛撫し合うといった同性愛的関係にまで発展した。しかし，この関係は，Z氏に思春期の身体的変化が現れるとともに解消された。Kohutは，これが情緒的に母親から離れていく時期と重なっているので，カウンセラーとの関係は「理想化された母親との前エディプス的関係の再現」だとみなした。

精神分析の後半期になると，Z氏のマゾヒスティックな空想は減少し，ついには消滅した。彼は，母親の家を出て，一人暮らしを始めた。ついには，女性とデートをするまでになり，性的関係も経験した。また，ある女性と交際し始め，分析が終わる頃にはその女性との結婚も考えていた。

このような流れを，Kohutは次のように考えた。Z氏の誇大性と自己愛的欲求は，前エディプス的母親への固着であり，エディプス的な競争心と去勢不安への防衛である。これを徹底操作した結果，前エディプス的母親への愛着が軽減し，それにつれて抑圧されていたエディプス葛藤が復活してきたのであると。Z氏が終結6ヶ月前に見た次のような夢も，分析の前進を示すものと思われた。

「Z氏は家の中にいて，ドアには亀裂がある。外に父親がいて，贈り物の包みを抱えて，入れてもらうのを待っている。Z氏は非常に驚いてドアを閉め，父親を入れないようにした。」

夢についてのZ氏の連想から，これは父親が家に帰ってきたときのことに関連していると思われた。Kohutは，この夢を父親へのアンビヴァレンスを示すものと考えた。Kohutは，父親への敵意や去勢不安を強調した解釈を行った。すなわち，Z氏は強い男性に対する競争心や男性的自己主張を避けているのであり，母親への前エディプス的愛着や父親への服従的・受動的な同性愛的態度に退行しているのだという解釈を伝えたのである。

＜終結期＞ Kohutは，Z氏の前進が無意識的葛藤の意識化によってもたらされた構造的変化に基づくものだと考えた。Freud理論

に従えば，すべてが収まるべきところに収まっているように思えた。しかし，この時期には終結期に見られるはずの特徴が欠けていた。それは，話し合われた内容の派手さに比べて，情緒的には浅い感じがし，感情をかきたてられることがなかったことである。ただ，Kohut との別れについてのＺ氏の感情には本当の深みが感じられた。

③第２分析（自己心理学的精神分析）

＜コンサルテーション（２回）＞分析終了後４年半後にＺ氏から手紙が届き，そこには分析に戻りたいという思いがほのめかされていた。Kohut は，２回のコンサルテーションを行った。Ｚ氏は，依然として独身であり，性的関係は情緒的深みに欠け，真の満足を欠いていた。仕事の面でも表向きはうまくやっていたが，喜びを感じることはなく，仕事を負担で退屈なものと体験していた。Ｚ氏のマゾヒスティックな傾向は治癒したのではなく，抑圧されただけであり，今や矛先を変えて仕事や生活全般に影響を及ぼしているのではないかと思われた。

Ｚ氏に分析再開を促した重要な出来事があった。それは，最近母親が深刻なパーソナリティの変化を示していたことである。母親は，Ｚ氏が一人暮らしを始めた５年前から，家に引きこもることが多くなり，パラノイア的妄想を示していた。Ｚ氏は母親という愛情対象を失ったという気持ちと母親を病気にさせてしまったという罪悪感を感じていた。

Ｚ氏に分析が必要なことは明らかであったが，Kohut の事情ですぐに分析を始めることが難しかった。しかし，２回目のコンサルテーションのときには，Ｚ氏の緊張がほぐれ，顔色も良くなった。そして，Kohut が「分析を６ヶ月間待ってほしい」と頼むと，Ｚ氏は承諾した。Kohut は，「必要なら時々は面接してもよい」と伝えたが，Ｚ氏は一度手紙を書いてよこしただけで，面接を要求することはなかった。Kohut は，Ｚ氏の幸福感の増大を「理想化転移」であろうと考えた。

＜第１期＞Ｚ氏の第２分析が始まった。最初のセッションで，Ｚ氏は前の晩にみた夢を報告した。その夢は，次のように行為も言葉も伴わないものであった。

「それは，丘，山，湖がある田舎の風景の中にいる黒い髪の男性のイメージでした。その男性はそこに静かにゆったりと立っていましたが，強くて信頼できそうに見えました。彼は都会風の服装をしており，複雑ですがきちんとした着こなしで・・・指輪をしており，胸のポケットからハンカチがのぞいていて，手には何か・・・確か一方の手に傘を持ち，もう一方の手に手袋を持っていました。その男性の姿は，大変人工的な感じがし，浮き上がって見えました・・・対象に焦点が合い，背景はぼけている写真の中の人のようでした。」

Ｚ氏は，風景からサマーキャンプの時を，髭からは父親を，また傘，手袋，ハンカチ，指輪からは Kohut を連想した。このことから，夢の中の男性は，父親，キャンプ・カウンセラー，分析家が凝縮されたものであると思われた。また，その印象的な外見，誇らしい態度，Ｚ氏がその人物について語るときの尊敬の調子から，理想化転移(注4)が生じていることが示唆された。Ｚ氏は，連想のなかで，第１の分析の末期に見た「父親が贈り物の包みを抱えて帰ってくる夢」を思い出した。このことは，上記の夢と最初の分析との間につながりがあることを示していた。Kohut は，自己対象転移に対する

新しい認識に従い，理想化転移の発展を妨げないように努めた。

（注４）患者がセラピストを理想化自己対象として体験する転移を「理想化転移（idealizing transference)」という。同じく，患者がセラピストを鏡自己対象として体験する転移を「鏡転移（mirro transference)」といい，セラピストを双子自己対象として体験する転移を「双子転移（twinship transference)」という。これら三つの転移を総称して「自己対象転移（selfobject transference)」と呼ぶ。

Ｚ氏の理想化は短期間しか続かなかった。約２週間後に，理想化は消失し，今度は「鏡転移（融合タイプ)」(注５)が生じた。つまり，Ｚ氏は，自己中心的で要求がましくなり，完璧な共感を求めるようになった。Ｚ氏の心理状態に対する Kohut の共感が少しずれていたり，Kohut がＺ氏の伝えたいことを少し誤解したりしても，Ｚ氏は怒って反応しやすくなった。最初の分析にもこれとよく似た時期があった。しかし，今回は，この行動の心理的意味についての Kohut の理解が全く違っていた。最初の分析では，Kohut はＺ氏のこうした行動を防衛とみなし，対決する姿勢を取った。しかし，今回は，これが幼児期の状況の再現であり，分析的に価値のあるものとみなした。

（注５）Kohut は，自己対象転移に原始的で未熟なものから成熟したものへの発達があると考えた。融合タイプというのは，鏡転移の原始的な形である。自己対象転移が原始的であるほど，相手との結びつきが癒着的・共生的で，相手に完璧な応答を求め，それが得られないと満足できない。

古典的精神分析から自己心理学への Kohut の転換は，二つの好ましい結果をもたらした。その一つは，第１分析で見られたＺ氏の怒りの反応がなくなったことである。また，もう一つは，患者のパーソナリティの探求されていない深層部に入り込むことができたことである。Ｚ氏が示した姿勢や態度は，伝統的な対象関係の用語で説明するなら，母親を独占でき自己愛的満足に浸れた頃の再現である。そして，母親によって溺愛され過剰な満足を味わったために，このような固着が生じたということになる。しかし，伝統的な説明では，次の二つの重要な問題が正しく解明できない。ひとつは，彼の尊大さと並存する慢性的絶望感であり，もうひとつは，自分が注目されるのは当然だという強い主張と矛盾する性的マゾヒズムである。

Kohut の理論的視点の変化は，今まで見えなかった意味に気づくことを可能にし，Ｚ氏に対する態度をも変容させた。最初の分析で，Kohut は，Ｚ氏に自己愛的要求を放棄し「成長する」ように期待していた。しかし，Kohut は，第２分析ではこの「健康と成熟の道徳」を放棄し，Ｚ氏の発達早期の経験を再構成する課題にのみ専念することができた。

Kohut は，最初の分析では，Ｚ氏の母親への理想化を無意識的な近親相姦的愛情の意識化されたものとみなした。しかし，Ｚ氏が最初の分析で語った母親の良いイメージは，母親が家庭の外で見せている姿であった。実は，Ｚ氏の母親には周囲の者を奴隷のように従わせ，独立性を奪ってしまう面があった。また，母親は病的なほど嫉妬深かった。これは，Ｚ氏も，そしてＺ氏の父親も，十分認識するまでには至らないが，感じていたことであった。Ｚ氏は，母親が何かしてくれるのは彼が母親の意志に服従

するからであり，母親との関係においては彼の自律的な欲求が禁止され，母親以外の人との関係が排除されていることに気づき始めた。また，父親が浮気をしたのは，母親から逃れたかったからだということに気づいた。そして，父親が家を出たとき，意識の底では，父親に見捨てられたと感じていたことも知った。このことに関連した記憶の想起と母親との関係の本質についての洞察の深まりとともに，Ｚ氏は激しい不安を体験した。この不安は深刻な抵抗を生み，彼は分析的探求をしりごみし，「自分の記憶は正しいかどうか分からない」などと言い始めた。これは，「原始的自己対象としての母親を喪失することに関連した恐れ」であった。この喪失は，Ｚ氏に，自己が解体し失われてしまうのではないかというおびえ（統合崩壊不安）を抱かせていたのであり，そのため否認の防衛が働いていたのである。

Ｚ氏は，上記のような不安を乗り越えて，今まで普通だと思っていた母親の行動のなかに奇妙な点があったことを認識し始めた。例えば，母親は，Ｚ氏の将来について話すとき，Ｚ氏が母親のもとを離れないということを当然の前提としていた。母親は，Ｚ氏の便を詳しく調べたり（６才まで），Ｚ氏の顔の小さな吹出物にこだわり，それを取り除いたりする行動があった（青年期まで）。Ｚ氏は８歳の時に個室を与えられたが，プライバシーはなく，ドアはいつもあけておくように言われ，母親が突然部屋に入ってくることもあった。Kohut は，Ｚ氏の母親は境界例であり，Ｚ氏をコントロールすることによってパーソナリティの精神病的な核が露呈するのを免れていたのだと判断した。

それでは，この重要な話題がなぜ最初の分析では問題にならなかったのか。実は，この話題はすでに現れていたのだが，Kohut もＺ氏もそれに関心を向けなかったのである。Kohut の古典的な視点は，Ｚ氏からみると母親の世の中に対する歪んだ見方と同じようなものであった。Ｚ氏は幼年期に母親に順応したのと全く同様に Kohut の確信に順応していたのである。つまり，一見治癒のように見えたＺ氏の改善は，Kohut に対する同調の結果だったのである。しかし，そうすると，第２の分析の結果もＺ氏の同調ではないかという疑問が生じる。しかし，Kohut は，第２の分析の結果が同調ではない証拠として，Ｚ氏の同調したい欲求が探求され徹底操作されたこと，人生に取り組もうとするＺ氏の熱意にはかつてない深みと真実性が感じられたことをあげている。

この経過から，幼児期の自慰と原光景行動についても新しい見方が可能になった。これらは，最初の分析では「前性器的満足を通しての幼児的快感への固着または退行」とみなされていた。しかし，Ｚ氏が自慰や原光景に固執するのは，自己の健康な成長に本来的に伴う喜び，すなわち「独立し成長することに伴う喜び」や「自己の境界を明確にし，自立していくことにともなう喜び」がなかったからである。母親と癒着していたＺ氏には，抑うつ的な暗い気分が漂っていたのであり，自慰にも原光景への没頭にも本当の喜びはなかったのである。Ｚ氏の自慰は，もっとも感じやすい身体部位への自己刺激を通して，自己に活気を与え，自己の存在を確認しようとする行為であった。原光景体験も，Ｚ氏にとっては無神経に与えられた過剰刺激的体験であり，母親の行動にのみこまれてしまうことであった。自慰の際のマゾヒスティックな性的服従の空想は，母親の要求に服従しているＺ氏の状況を表現していたのである。

＜第２期＞母親との融合的癒着からの解放が進むにつれて，Ｚ氏の抑うつは軽減し，Ｚ氏は自分の要求を強烈に体験でき，活発に表現するようになった。Ｚ氏は，活気，気分の高揚，希望を体験し始めた。同時に，彼の話は，母親へのこだわりから父親についての思いに移っていった。Ｚ氏は，Kohutの家庭や夫婦関係を含む個人的なことを知りたがるという転移を示し始めた。Kohutは，この問の裏に，妻に服従して息子の情緒的支えにならない父親とは異なる強い父親を求める気持ちが隠れていることに気づいた。それを解釈すると，Ｚ氏の抑うつと希望のなさが劇的に軽減し，Ｚ氏はもうKohutのことを知りたいと要求しなくなった。また，彼の要求に細部までは応じなかったKohutの姿勢を「強さ」の印として受け取った。Kohutは，Ｚ氏が思春期に関わりをもったキャンプ・カウンセラーの男性についても，強くて父親のような男性，おそらくＺ氏にはいなかった尊敬できる兄のような存在の人であったのだろうと考えた。これは，Ｚ氏自身の見解とも一致していた。

この頃から分析は大きな転回点を迎えた。Ｚ氏は，父親のパーソナリティの肯定的特徴について語り始めた。しかし，ここでも，Ｚ氏は深刻な不安に見舞われた。Ｚ氏は，自分が解体してしまうように感じ，強い心気的こだわりを示した。夢には，荒野，焼き尽くされた都市，死体の山などが現れた。Ｚ氏は今や自己対象としての母親と結びついた原始的自己を放棄しつつあった。そして，今までは認識していなかった父親との関係を中心にして中核自己を復活させる準備をしていた。この時期に，一度だけ母親の夢が報告された。それは「母親が彼に背を向ける夢」であった。Ｚ氏はこれまでで最大の不安を感じた。この夢は，息子が独立へと向かおうとする際の母親の冷たい引きこもりを示すものと理解された。

父親についての記憶のなかで，Ｚ氏がとくに詳しく述べたのは，９才の時の父親と二人だけのコロラドへのスキー旅行であった。この時のエピソードから，弱くて存在感がないように見えた父親が，実は統合のとれたパーソナリティと資質を持っていたことが分かってきた。父親はスキーがうまく，ウェイターやメイドの扱いも心得ていて，父親の周囲には人だかりができた。電話での会話や新聞を読んでいる時のコメントから，仕事の世界での父親の決断力，見識，技能を垣間みることができた。ここで重要なのは，Ｚ氏が父親の驚くべき特性を発見したということよりも，父親が母親とは独立した人生を歩んでいたこと，父親のパーソナリティが母親のパーソナリティほど歪んではいないことに気づいた点である。Kohutは，これらの経験が患者にとって持つ意味に焦点を合わせて解釈を行った。そして，Ｚ氏の「尊敬でき誇りに思える理想化された男性がほしい」という欲求に対する理解を表現した。

父親についての記憶は，Ｚ氏が当時９歳であったにも拘らず，最も深く抑圧されていた。しかし，父親についての記憶の底には，病理的なエディプス葛藤は隠れていなかった。すなわち，父親に対する無力感を伴う競争心は見られず，むしろ父親を誇らしく思う気持ちが伴っていた。父親に打ち負かされたという抑うつや劣等感は見られず，父親のなかに「男性的な力のイメージを発見した」，そして「それと一体化して自律的な男性的自己を強化することができる」という歓喜があった。

＜終結期＞Ｚ氏は，再び，最初の分析の終

わりに見た「父親が贈り物の包みをもって帰ってくる夢」を思い出した。新しい理解とＺ氏の連想から，この夢は，父親への敵意と去勢不安を表すものではなく，あまりに長く父親なしに生きざるをえなかった少年の心理状態を示すものと思われた。すなわち，少年は，父親を理想化すると同時に父親の欠点をも発見し父親に失望することを通して，理想化された父親が果たしていた機能を内在化し，男性性を備えた自立的自己を形成していくのであるが，Ｚ氏はそうした機会を奪われていたのである。Ｚ氏は，母親に隷属することによって，ある種の満足を得ることはできたが，男性性を備えた活動的で独立した自己を経験する喜びはなかった。男性的自己対象としての父親を媒介にして男性としての自己が獲得され強化されていく時期に，父親が身近にいないと，父親を求める少年の欲求はとても激しいものになる。父親の帰還は，Ｚ氏の一番重要な心理的欲求が満たされる可能性をもたらした。しかし，求めていたものであっても，それがあまりに急に，一気に与えられることは，外傷的体験になることがある。求めていた父親が突然登場し，父親への広範な理想化と同一化が急激に生じると，それまでの自己が失われてしまうような不安が引き起こされる。そのため，Ｚ氏は，父親を希求していながら拒まざるを得なかったのである。Ｚ氏の夢は，このような状況，すなわち父親から心理的贈り物を突然与えられたために，それに対処することができず，せっかくの贈り物を拒まざるをえない状況を表していた。この夢は，幼年期に父親が帰ってきたときの状況であると同時に，現在 Kohut との転移関係においてＺ氏が直面している状況をも表現していると思われた。

治療の終結が決まった後も，Ｚ氏の症状の悪化や深刻な不安は出現しなかった。短期間であったが，Ｚ氏は Kohut を失うことについての悲しみを表現した。また，「もう父親と親しく交わることができず，自分のしたことを父親に誇りに思ってもらうこともできないのは残念だ」と述べた。そして，「最初の分析が失敗したので分析が本来よりも長引いてしまった」と言って怒りを表現するセッションも何回かあった。しかし，終結前の最後の数週間は，親の欠点に対して今までより共感的で受容的な態度を示すようになった。母親を理想化はしないが，母親の好ましい特徴や母親から得たものがあることも認めていた。事実，彼のもっとも大事な技能・才能や野心・理想には，母親からの影響は見られても父親のパーソナリティの影響は見られなかった。しかし，精神分析によって，父親の男性性や独立性とのつながりが再形成され，彼の野心，理想，基本的技能・才能の「情緒的核」が決定的に変容したのである。そして，彼は自分のパーソナリティの資質を本当に自分自身のものとして経験し，マゾヒスティックな同調ではなく，独立した自己の活動として，人生目標に向かっての歩みを始めたのである。

（２）Ｚ氏における父親の役割についての考察

Ｚ氏の精神分析の経過を振り返り，自己心理学的に考察すると，Ｚ氏は，自己対象である母親との融合的癒着関係から離れるのと並行して，次第に父親に目を向け，父親の健康な資質を再発見した。また，父親は母親に服従し呑みこまれていたのではなく，独立した人生をもった人であったことを認識した。この認識が，Ｚ氏の新しい男

性的自己の中核となっていった。言い換えれば，母親とは違う存在としての父親がZ氏のなかで明確になることによって，新しい男性的自己の形成が促進されたと言える。ここでの父親（像）の機能は，先に述べたモデル②（子どもの男性性・女性性を強化する父親）として考えることができる。

Z氏の第2分析の転移の経過を振り返ってみると，まず短い理想化転移が生じ，それが鏡転移に置き換わり，最後に上記のような理想化された父親への希求が生じた。短い理想化転移に引き続いて生じるこのような鏡転移を，Kohut（1971）は「二次的鏡転移(secondary mirror transference)」と呼ぶ。そして理想化転移から鏡転移へと移る継起が幼児期の出来事の継起を反復するものであると考えている。つまり患者は，幼児期に父親を理想化しようとしたが，この試みはうまくいかず，母親との融合的関係に後戻りしてしまったということである。したがって，Z氏の分析の最後に登場する父親への理想化は，最初に失敗した試みの新たな企てであり，これに成功することは患者の停滞していた発達の再開を意味するわけである。

しかし，この経過をKohut（1979）とは異なる観点からみると，これは母親との共生的関係からの分離-個体化ともみることができる。Z氏が母親に対する防衛的理想化から脱却し，母親の病理性に気づいていく過程は，まさに母親からの分離-個体化そのものであるし，その過程で体験した激しい不安は一種の見捨てられ不安ということもできる。その過程において，父親への理想化が生じ，その理想化された父親像が分離-個体化を支えたとも考えることができる。そうすると，これは先に述べたモデル③（母親からの分離-個体化を促進する父親）を適用して考えることが可能である。Kohutとしては，この過程を原始的な自己対象体験が成熟した自己対象体験へと推移したと言いたいのであろうが，それは同時に母親からの分離-個体化としてとしてとらえることもできる。つまり，自己対象体験の成熟ということと分離-個体化とは表裏の関係にあるのではないかと考えられる。

それでは，先に述べた父親の役割のモデル①（子どもを去勢する父親）についてはどうであろうか。Kohut自身は，Z氏の第一の分析では，古典的精神分析理論に従ってこのモデルで解釈を行ったわけである。それは適切でなかったというのが，Kohutの述べたかったことであろう。しかし，Muller（1989)は，Z氏と父親とのコロラドへの旅行に注目する。このときZ氏は，母親の人生からは独立した人生を有する有能な人であることを発見したわけであるが，Z氏は，父親がこの旅行に女性を同伴していたことを思い出し，その女性が父親の愛人であったかもしれないと語った。Z氏は，この事実を（父親からそうするように要求されたわけではないが）母親には秘密にしていた。Muller(1989)は，これがZ氏にとって象徴的な去勢になったのだと示唆する。しかし，ここでMuller(1989)の言う去勢は，Freud（1917）が言うものとは性質が異なるものであることになる。つまり，Z氏は，自分が父親よりも優れた存在ではなく，父親と愛人の関係には入り込めないことを知ることによって去勢されたということもできようが，これはFreud（1917）が言うような意味での去勢ではないであろう。つまり，この去勢にはFreud（1917）の言うような父親への否定的感情は伴われておらず，Freud（1917）のモデルがそのままあてはまるとはいえないであろう。

モデル④（母親の失敗を補償する父親）については，Ｚ氏の自己の要素（野心，理想，才能・技能）には母親の影響が強くみられ，父親の影響はみられなかったと，Kohut（1979）は述べている。しかし，父親が仕事や対人関係で有能で尊敬できる側面をＺ氏の記憶に残していたということは，母親との外傷的関係を補償する自己の潜在的要素を与えたということであり，モデル④もあてはまる面があるといえるかもしれない。

引用文献

Abelin, E. L.（1971）. The role of the father in separation-individuation process. In J. B. McDevitt & C. F. Settlage（Eds.）,（1971）. *Separation-individuation.* New York: International Universities Press. pp. 229-252.

Abelin, E. L.（1975）. Some further obsevation and comments on the earliest role of the father. *International Journal of Psycho-Analysis*, **56**, 293-302.

Blos, P.（1974）. Genealogy of the ego ideal. *The Psychoanalytic Study of the Child*, **29**, 43-88. New York: International Universities Press.

Blos, P.（1985）. *Son and father: Before and beyond the oedipus complex.* New York: Free Press.（ピーター・ブロス　児玉憲典(訳)（1990）. 息子と父親　誠信書房）

Elson, M.（1986）. *Self psychology in clinical social work.* New York: W. W. Norton.

Ferenczi, S.（1933）. Sprachverwirrung zwischen den Erwachsenen und dem Kind. *International Zeitschrift fur Psychoanalyse*, **19**, 5-15.（シャーンドル・フェレンツィ　森　茂起(訳)（2000）. 大人と子供の言葉の混乱－やさしさの言葉と情熱の言葉－心の危機と臨床の知(甲南大学人間科学研究所紀要), 1, 163-172.）

Freud, S.（1917）. *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse.* Frankfurt am Main: Fischer Verlag.（フロイト　懸田克躬(訳)（2001）. 精神分析学入門（Ⅰ・Ⅱ）　中央公論社）

Greenson, R. R.（1968）. Dis-identifying from mother: Its special importance for the boy. *International Journal of Psycho-Analysis*, **49**, 370-374.

Kohut, H.（1971）. *The analysis of the self.* New York: International Universities Press（ハインツ・コフート　水野信義・笠原 嘉（監訳）（1994）. 自己の分析 みすず書房）

Kohut, H.（1977）. *The restoration of the self.* Madison: International Universities Press.（ハインツ・コフート　本城秀次・笠原嘉(監訳)（1995）. 自己の修復　みすず書房）

Kohut, H.（1979）. The two analyses of Mr. Z. *International Journal of Psycho-Analysis*, **60**, 3-27.

Kohut, H.（1984）. *How does analysis cure?* Chicago: The University of Chicago Press.（ハインツ・コフート　本城秀次・笠原嘉(監訳)（1995）. 自己の治癒　みすず書房）

Lessem, P.（2005）. *Self psychology: An introducion.* Northvale: Jason Aronson.

Loewald, H., W.（1951）. Ego and reality. *International Journal of Psycho-Analysis*, **32**, 10-18.

Mahler, M. S., Pine, F., and Bergman, A.（1975）. *The psychological birth of the human infant.* New York: Basic Books.（M. S. マーラー他　高橋雅士・織田正美・浜畑紀(訳)（1981）. 乳幼児の心理的

誕生 黎明書房)

Masson, J. M. (1984). *The assault on truth: Freud's suppression of the seduction theory.* New York: Farrar, Straus, & Giroux.

Mollon, P. (1993). *The fragile self : The structure of narcissistic disturbance and its therapy.* Northvale: Jason Aronson.

Muller, J. P. (1989). Lacan and Kohut: From imaginary to symbolic identification in the case of Mr. Z. In D. W. Detrick & S. P. Detrick (Eds.), *Self psychology: Comparisons and contrasts.* Hillsdale: Analytic Press. pp.363-394.

及川　卓 (1983). 男性性確立の挫折と崩壊—性別同一性障害について　清水將之・村上靖彦(編)　青年の精神病理３ 弘文堂 pp.105-135.

Stoller, R. J. (1968). *Sex and gender.* Vol.1. New York: Science House.

牛島定信・福井　敏 (1980). 対象関係からみた最近の青年の精神病理—前青年期ドルドラムと前エディプス的父親の創造—小此木啓　吾(編)　青年の精神病理２ 弘文堂 pp.87-114.